解してしっかり文法を身につけた国内生なら、帰国生を助けてあげることもできるのです。

小学校では、イギリス人の先生が、英語で算数の授業をすることがあります。ある日の4年生のクラスでは、グループ活動のそれぞれのグループに帰国生が必ず入るようにしました。数字やグラフを見ながらの説明は、言葉だけのばあいよりも分かりやすいし、英語の時間には、いつも英語で指示を聞いているので、子どもたちはそれほど困った様子ではありませんでした。それでも、新しいことを説明されたり、少し複雑な指示をされたりすると完全に理解できないことがあります。各グループにいる帰国生は、ときどき先生の助手のような役割もはたしていました。帰国後日が浅く、普段の日本語の授業では友達に助けてもらうことの多い子も、今日は自信をもって友達の世話をすることができて、満足そうな表情でした。

日本語が第一言語である生徒たちが英語で授業を受けるときは、日本語の授業にはない難しさを克服しなければなりません。それは、帰国生が海外の学校に移ったとき、あるいは帰国して日本語で学習することになったときの体験に通じるものがあります。海外体験のない生徒たちにとっては、短い時間ではあってもよい経験になるにちがいありません。また、中には、日本語でない言葉を使って勉強することに新鮮な楽しさを見いだす子どもたちもいます。

この時間は、日本語を使うことを禁止してはいませんが、多くの子どもたちは自然に英語で先生の質問に答えます。日本語では表現しにくいことが英語ならもっと簡単に表現できる場合があることにも気づきます。

◆ 力を発揮できるように

ただし、帰国生と国内生が一緒になれば、いつでも新しい力が発揮できるというわけにもいきません。帰国生が非常に少ない環境では、どうしても多数に合わせなければならない状況になってしまって、難しい場合もあります。先日国内の学校から啓明に転入して来た中学生は、生まれてからの人生のほとんどをイギリスで過ごした生徒ですが、日本に来てすぐに入った学校ではなかなかうまく行かず、特に英語の時間に苦労したと話していました。彼が普通に英語の文章を読むと、その音に慣れていない同級生たちがびっくりして、一緒に勉強しづらい雰囲気になってしまったのだそうです。耳慣れない発音をする人、髪の毛や皮膚の色など見慣れない外見の人などに接すると、自然に振る舞えなくなってしまうのはだれにでもあることでしょう。同級生たちにしても、外国から来た新しい友達をあたたかく受け入れようとする気持ちは持っていたのだと思いますが、慣れないことに直面し、どうしたらよいか分からなくなってしまったのではないでしょうか。

図書室：学習でも助け合いができます

帰国生の多い学校の生徒たちは、日本語が多少外国語訛りだったり、話のやりとりがいくらかとんちんかんだったりしてもびっくりしません。今までにたくさん経験をしているので、そんなものだと思っているからです。英語の発音がイギリス人ふうであっても、初めて聞く音ではありませんから、違和感はありません。

いわゆる異文化体験の豊富さが、余裕を呼ぶということでしょうか。

外国の物が身近にあふれ、町で外国人の姿を見ることがめずらしくない時代になりましたが、まだまだ日本の子どもたちの異文化体験は少ないと言わなければならないようです。世界的に見れば、ちがう言語を話す人たち、いろいろな生活習慣を持つ人たちが一緒に生活するのはむしろ普通のことでしょう。そのような環境にとまどうことのないような力と感覚を育てていきたいものです。

啓明学園　初等学校・中学校・高等学校
国際教育センター
〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15
電話：042-541-1003
ホームページ：www.keimei.ac.jp
E メール：kokusai_info@keimei.ac.jp

帰国生と国内生が助け合って、お互いの力を伸ばしていく。そんな素晴らしい、啓明学園での実例を紹介していただきました。

国内生が異文化に接して戸惑うことは容易に理解できます。しかし、帰国生たちが固まっている例もよく聞きます。日本社会への「適応」が大変なのはよく分かりますが、異文化体験の豊かな帰国生が帰国生と国内生の「共生」の積極的なリーダーになって欲しい、と思います。そのきっかけを作ってくれる学校は多くありません。

日本と外国の異なった文化で育った経験を持つ子ども達が、お互いの「宝」を生かし合って、学び育ち、そして社会を作っていく。世界がこんな社会になれば、と私は願っています。そんな思いで、海外と日本の子ども達を、私は応援してきました。皆さん、ご一緒にいかがですか？